

『林紓冤罪事件簿』ができるまで
あるいは発想と研究方法について

樽本照雄

台湾の国立政治大学において、私は林訳シェイクスピアと林訳イプセンについて話した。

参加者の大多数は、学生と大学院生らしい。一通り説明し終ると、どうやって原作をさがしたのか、とひとりから質問がだされた。インターネットで検索して、と答える。すると、そうではないという。林訳の底本が小説化本だとなぜ気づいたのか、との問いだ。なるほど、「新しい発見」にどのように結びついたのか、その発想の過程について知りたいらしい。論文をどのように書いたらいいのか。この問題に直面しているのだろう。いちばん興味を感じたところだとわかる。質問した人は、目のつけ所がいい。

以前はインスピレーション *inspiration* といわなかったか。ひらめき、だ。今はセレンディピティ *serendipity* と表現する人もいる。辞書には「掘り出し上手」とある。イギリスの文筆家が造語した。偶然によいものを見つける。林訳問題もその例のひとつか。偶然ねえ。そうすると私にだけ「偶然」がおこったことになる。普通に考えて、ありえない。

「ひらめき」にしても、準備段階取り時にほとんどの力を汗として出しつくしたあとにふってくる。それも、必ずおりてくるという保証はない。考えつづけるという行為とは無関係に「ひらめき」が出てくるとは思えないからだ。なにも考えていないのに偶然掘りあてるだろうか。そもそも、なにかを求めているからこそ掘るのではないか。

いきなりはじめても理解できない。

20世紀への変わり目における中国での話だ。外国文学の翻訳で活躍した林紓

(1852-1924)という知識人がいた。彼の翻訳原作に関して、従来知られていなかったまったく新しい事実を明らかにした。そういう種類の話題である。

林紵のある翻訳作品について、中国大陸、香港、台湾、日本そのほかの研究者が、つまり学界全体が長年にわたって罵倒しつづけている。80年をこえる。日本でいえば大正時代に非難がはじまり、昭和をへて平成の現在にまで続いている、といえはわかりやすいか。定説そのものといっていい。中国では、中華民国から中華人民共和国になって成立60周年を目前にひかえた時期までだ。それくらい長期間にわたって林紵は批判されている。

だが、それは誤解にもとづいたものなのだ。中国近現代文学研究界では、この信じられないような事態が実在している。誤解だと表現するのでは生ぬるい。無実の罪なのだ。私が、林紵冤罪事件だと称する理由である。濡れ衣を着せたまま、それが事件であるという考えすら学界には存在しない。この事実に対する私の驚きがその根底にある。中国文学研究史上まれにみる冤罪事件にほかならない。

林訳について長年信じられてきたことが誤りだった。しかも冤罪事件である。何がどのように間違っていたのか。その実情について台湾で報告した。

私は、少し心配だった。なぜなら、私が話すのはまったく新しい事柄だ。いきなり説明して理解してもらえるだろうか。台湾だからというわけでは、当然ない。どこであっても同じだ。

以前、日本のある場所で別の話をしたときのことだった。話し終わったあとだ。学生のひとは、匿名のアンケートに記入して、自分が理解できないのは教員、すなわち私が悪いと責めるのである。その学生は、どう考えても中国とは関係がない。何も知らないといっていい。私が話すのは、大多数の人にはなじみのない話題だとわかっている。だから、事前にずいぶん準備をした。資料を配付して丁寧に解説したところが、そういう結果である。私は、少し驚き気落ちした。

この林訳問題も、いままで誰も指摘していない。しかも、従来の評価を180度方向転換させる。納得してもらうのは困難ではないか。

だが、杞憂だった。中国文学研究に従事している、あるいは専門にしようとしている優秀な台湾の人たちである。問題の重要さをたちまち把握したばかりか、冒頭の問いが発せられたのだ。何も知らなければ出てくるはずのない種類の質問だ。

問題解決にいたった種明かしをしる、という意味だと私は理解した。

聞いてみれば、何でもない。だが、そのなんでもないと思われることに、なぜ今

まで誰も気づかなかったのか。中国現代文学研究界が、従来まったく疑問にも思わず、問題があることすら察知しなかった。ゆえに、誤りが誤りであるという認識もない。その理由は何なのか。問題解決への過程と、問題そのものが生まれた研究環境について考える機会となったのだ。

林紓は、清朝から中華民国初期を生きた知識人だ。彼が死去したのは1924年だった。享年七十三。それから数えても80年以上が経過している。本稿で紹介する事柄は、その間、研究者のひとりも指摘することができなかった。自画自賛だという人がいるだろう、と先回りしていう。成功例を説明すると自慢話になりかねない。しかし、それだけには終らなかった。さらに大規模な問題を浮き彫りにすることになる。ここに紹介したい。

林紓翻訳に対する批判

林紓が漢訳したシェイクスピアとイブセンについて、私が新しい知見を加えた。

といっても、背景には私独自の研究の流れがある。ある日、関係のないところで探さないのに出てきた、ということはある。考え続けさがし求めても見つからないのが普通だ。何を考えていたか。

林訳とは、林紓が口述訳者と共同で翻訳した作品群を指している。200種をうわまわる外国作品を漢訳した。イギリス、アメリカ、フランス、スペイン、ノルウェー、ロシア、日本など諸外国にわたる。まさに超人的な仕事量だということができる。

それが可能だった理由は、林紓が外国語を理解しなかったところにある。

やや逆説的ないいかたになるだろう。すなわち、林紓は、外国語に堪能な人物と一緒に組んで翻訳した。共同翻訳なのである。訳者が口述翻訳するのを聞きながら、林紓が得意の古文で筆記する。これが林紓の翻訳方法だ。協力者が多くいればそれだけ多くの作品を翻訳できる。ゆえに、この大量の漢訳を社会に送り出すことが可能だった。翻訳のひとつの方法である。非難されるべきものではない。

林紓を中心とした個人的で小規模な「翻訳工房」だったと考えれば理解しやすい。

「翻訳工房」ということばは、私が本稿ではじめて使用するものだ。しかし、工場という発想それ自体は、私のものではない。先例がある。

ひとつは、「文章製造工場 [文字製造廠] 」といった人がいる。ただし、こちらは翻訳ではない。訪問取材だ。

林紘の友人である高鳳岐（林紘と同時に拳人。商務印書館編訳所に勤務）が林紘『技撃餘聞』（上海・商務印書館1908未見）の序文にそう表現した。林紘が聞き書きを記録して、レコードのようにありのままだからそういう表現になったらしい*1。他人がしゃべるのを聞いて筆記するのだから、林紘にとっては翻訳のばあいと同じことだ。

もうひとつは、陳衍（石遺。林紘と同時に拳人）「林紘伝」（『国学専刊』第1巻第4期1927.10.2。台湾影印1970.2。94頁）だ。次のようにある。「その友陳衍は、かつて戯れにその部屋を「造幣局[造幣廠]」とよんだことがある。動かせば金になるということだ。しかし、林紘は金銭にはまったく無頓着で、人の急場を助け救済するのに出し惜しみすることはなかった」

「造幣局」というこの表現は、後に独り歩きをはじめ。多くの作品を刊行した。共同で翻訳するやり方の林訳小説が、あたかも粗製濫造であるかのような印象をあたえるように意図をもって引用されることになった。林紘をおとしめたい人は、自説に都合のいいように文脈を無視して断片を高く掲げる。林紘が他人を快く援助した後半部分は無視し、「造幣局」だけに注目する*2。金もうけのための工場だと短絡させるのだ。

私がいう「翻訳工房」ならば、林紘の名前しか出さないだろうと思われるかもしれない。そうではない。翻訳を公表する時、林は共訳者と必ず連名にしている。功名を林紘が独占するわけではない。公明正大なのである。

私は、林方式の翻訳 「翻訳工房」があってもよいと思っている。

原文に忠実な翻訳が出てくる必要があることは、いうまでもない。それらを含めているんな種類の翻訳があってもいい。その時代により、読者の需要が違おうだろう。それに応じた翻訳作品の形態があるはずだ。

それとは別に、林紘が外国語を理解しないことを彼の決定的な欠陥だと考える研究者がいるのも事実だ。中国にかぎらず、大多数の研究者がそうである。だが、外国語を理解する人物しか翻訳を行なってはならない、というのはあまりにも偏狭である。なぜ、林紘が「外国語を理解しない翻訳者」だといわれ、軽蔑嘲笑され痛罵漫罵の対象にならなければならないのか。私には不思議に感じられる。

林訳批判の理由のひとつは、つぎのように説明されている。

すなわち、シェイクスピア、イプセンの戯曲を勝手に変形して小説体で漢訳した。著名このうえもない海外の戯曲作品を林紘は散文体に改変している。図式化すれば

「原作戯曲 林訳小説」である。出てきた林訳が小説体になっているから、林紘が批判され続けてきた理由なのだ。ペイッ(中国風)。戯曲と小説の区別もつかない(私はこれを「区別がつかない」論と称する)。いっているのは私ではない。著名な研究者鄭振鐸がそう指摘し、そう書いている。劉半農が言い出したから、彼も含めてよい。わかったようでよくわからない理屈だが、林紘を侮蔑しているのは明らかだ。

結論を先にいっておく。戯曲を小説体で漢訳したというのは事実ではない。私は断言する。

林紘+陳家麟は、シェイクスピア原作を直接翻訳したのではない。林紘+毛文鍾は、イブセン原作を直接漢訳したのでもない。実は、原作の戯曲を小説化した英語版が存在しているのだ。同じく図式にすれば「原作戯曲 英文小説化本 林訳小説」という流れになる。

原作の戯曲にもとづいて英語で小説化した人がいた。林紘たちが漢訳にあたり底本にしたのは、その英文小説化本なのである。もともと小説化本だから翻訳して小説体になるのは当然である。それを従来は「原作戯曲 林訳小説」だと誤解していた。すなわち、80年をこえて継続されていた林訳批判は、間違いである。

私が行なったのは、翻訳底本を特定したことにすぎない。見方によれば、まことに小さな事実だ。しかし、80年以上も続いたこの誤認は、尋常なことではない。さらに、この小さな発見が、規模のより大きな林紘冤罪事件を解明する契機になるのである。

林訳批判が継続されているその時間の長さを表現するためには、具体的な研究者名を掲げて80本近くの文献を列挙するほかなかった。私が林紘の冤罪を主張してくり返すことなどは、彼のこうむった仕打ちに比較すればものの数には入らない。これが私の考えである。そのままを実践している理由でもある。

そこで本文冒頭の質問につながっていく。

原作戯曲と林訳の間にはさまって存在している英文小説化本について、どのようにして思いついたのか。どこでその発想を得たのか。従来 of 定説をくつがえす「新しい発見」にはどういう筋道で行き着いたのか。

「林紘を罵る快樂」

私が当時考え続けていたのは、つぎのことだ。

林紘の訳業を含めた彼の行動について、従来からの論説評論を検討しはじめてい

た。その作業をしながら私が理解したうえで名づけた論文の題名は、「林紘を罵る快樂」という。

1919年の五四事件が発生する直前までの林紘が検討の対象になっている。

諸論文を読むと次のことがわかった。すなわち、林紘の翻訳についてはおおむね正の方向で評価する。ただし、シェイクスピア、イブセンを小説化して翻訳した事実は否定しない。ここは大きな欠点だとして批判する。さらに、研究者の全員が、つまり研究界全体が、文学革命に反対した人物として林紘を罵り続けている。例外がない。しかも、研究者たちはあたかも罵るという行為そのものに快樂を感じているように私には思われた。罵ることが研究をしていることと等価なのだ。どうしてそのような状況にいたったのか。これを私なりに追求することが当面の目標だった。

検討の過程で最初に不思議だと感じたのは、これも本当に小さなことだ。林紘が書いた古文擁護を主張する短い文章にまつわる。

小さな部分につながって大きな問題が背後に隠れている。あるいは逆で、見えない大問題が小さくほんのわずかに手がかりを露呈させている。私はそう思うのだ。林紘問題のばあいは、その些細なほころび目が、彼の当該短文だった。

1910年代後半の中国では、伝統的な古文を廃して白話の使用を主張する論調が出現して渦巻いている。林紘は、その時すでに六十歳のなかばをこえた老人であり古文を守る立場を維持していた。

文人である林紘は、白話を激しく攻撃する文章を発表した。どの研究論文にもそう書かれている。

アメリカに留学していた胡適が、その林紘論文を批判的に紹介した。私は胡適の文章によって林紘の文章があることを知った。状況を知るためには当然読まなければならない文献である。林紘の白話批判はどのように激烈なのかを知りたいと思った。ところが、批判されている林紘の論文そのものを読むことができない。奇妙なことだ。

論文名は、わかっている。「論古文之不当廢」という。だが、どこに発表されたものなのか。見れば、林紘の著作目録などにもあやふやな記述しかない。発表月日も掲載紙も書かれてはいない。

おかしいではないか。反対派を代表する林紘の主張であるならば、研究者は原文を読んでいなければならない。それが研究の基礎であり常識だ。いまさら私がいうまでもない。文学革命派による林紘批判そのものを検討するためには、原文を手元

に置いてこそ研究ははじまる。それにもかかわらず林紘の文章は中国で刊行された
いかなる資料集にも収録されてはいない（研究に着手した当時はそうだった）。疑問
が生まれる。ということは、研究者たちは胡適による断片的な引用のみに依拠して
林紘を批判しているのではないか。原文を読まずに批判していることになる。中国
にはあれほど多数の研究者がいて、自国の文学研究においてまさか読まずに批判を
するだろうか（だが、これが事実だった）。私はそう感じた。不可解だ。

私は、林紘の原文をさがして新聞掲載のものを複写で入手した。見れば、題名は
「論古文之不宜廢」である。驚いた。題名そのものを少数の論者*3をのぞいてほと
んどの研究者が誤っていることになる。「不当廢」と書いて題名の1字が間違っ
ているのだ。

たった1文字ではないか、という人がいるに決まっている。たいした事ではない、
というはずだ。意味は同じだ、論旨には関係がない、と主張するだろう。私は、そ
のような例をいくつか体験してきている。事実、別の問題で私に手紙をくれてそう
断言した中国人研究者がいた。作品初版の刊行年が間違っていると指摘した。それ
に答えて、確かに初版は見ていないが、作家研究には関係がない、というのだ。細
かい部分にこだわらず、大きな問題を論じろといいたいわけだ。実物で確認する重
要性をその研究者はわかっていない。驚いた。

字数の問題ではない。勘違いがあるにしても、林紘の論文名を一律に誤る。研究
者が論文名を誤記するのは、原文を見ていないからだろう。多くが掲載紙も発表年
月日にも触れない。実物で確かめなければ詳細を明らかにできるわけがない。胡適
が最初に書き誤った、あるいは雑誌が誤植したのを踏襲した。

しかも、私が原文を探し出して読んでみると、内容は伝えられているものとは違
う。いわれているような激烈な白話反対論ではない。「古文は廃止すべきではない
ことを論じる」。論文の題名が、その内容を的確に表現している。林紘は、古文の
重要性を静かに述べているだけだ。どう読んでも、ここにいる林紘は、文学革命を
主張する人々にとっての強力な反対者ではない。だいいち胡適自身が、これを読ん
でそのあまりにおとなしすぎる論調にガッカリした。これでは敵にはならないとサ
ジを投げたくらいのものだ。しかし、のちの研究者たちは、林紘の原文を読まずに
彼を批判している。あるいは、白話文に反対した、という定説に思考が縛られてい
る。定説に従えば、林紘が書いてもいない文章が目に見えるということだ。私のい
だいた最初の疑問は、不思議という感覚から疑念に変化してより強くなった。

文学革命派から罵倒されている林紘について、文献を読むことによってその経過をさらに追跡することにした。

私が理解したのは、文学革命派である錢玄同、劉半農らが捏造論文(書簡)を発表までしてむりやり林紘を敵対者に仕立てあげたという事実だ。

北京大学学生だった羅家倫が歩調を同じくして林紘を批判したのは、特別に手がこんでいる。

志希「今日中国之小説界」(『新潮』第1巻第1号1919.1.1。影印本)である。彼は、英文著書を引用して、外国人ラインシュ Paul S. Reinsch が林紘を批判していると紹介するのだ。私が羅の示した英文原書を書店から取り寄せて読んでみれば、これにも驚く(それ以後も、手に汗握っておどろくことが続いた)。著者ラインシュは、翻訳に功績があった人物として林紘を称賛しているではないか。ところが、羅家倫の手にかかるとそれが逆転する。外国人が林紘を批判したことになっている。最初は、自分の目を疑ったほどだ。そこまでやるかね。著者の意図したことは反対方向に、羅家倫はねじ曲げて引用し紹介する。牽強付会である。こじつけというよりも、これも捏造としかいいようがない。

錢玄同は、この羅家倫論文を読んで自分の日記(1919年1月11日付。影印本)に感想を書いた。「羅は林琴南の翻訳小説を評して、正しい」。さすがに、捏造書簡を作った錢である。林紘批判がなされていれば気に入るのだ。

もともと英文だから誰も検証しないと羅家倫は考えたのだろうか。確かに誰も検証していない。のちの研究者もナメられたものだ。

ますます不信感が強くなる。問題は林紘の側にはなく、文学革命派の方にこそあるように私には思われた。

林紘の死去直後に鄭振鐸が登場する。

鄭にとって林は生前は敵対者であったが、死後だからこそ業績を公平に評価ができる。そう彼は告白するのだ。いかにも公平につとめ、その結果まるで正当に評価を下したかのように読めるではないか。

だが、鄭は公平を装って林紘批判を決定づけた。シェイクスピア、イブセンの戯曲を小説にして翻訳するほどのデタラメぶりだと林紘を批判したのは、ほかならぬこの鄭振鐸である。外国語を理解しない翻訳者林紘は、戯曲と小説の区別もつかない、と侮蔑と罵りの大合唱がはじまったのはそれ以後のことだ。「区別がつかない」論は今にいたるも研究者によって支持されている。林紘は本当に戯曲と小説の

区別がつかなかったのか、という疑問をひとりとしてもったことがないらしい。林紘は無知だ、とひたすら痛罵の声をあげて現在にいたるまで叫び続けている。

ひとことでいえば、研究者のほぼ全員が文学革命派の立場で当時の文学状況を把握している。それ以外の視点が存在しない。ましてや、林紘の側から文学革命派を見る発想など生まれる余地もない。その必要性が認識されることは元来ない。なにしろ、林紘は文学革命派によって敵対者に指名された。「勝者の文学史」においては、林紘は敗者としての扱いから逃れることはできない。しかも「勝者の文学史」しか書かれていない。これでは、林紘にとっては致命的だ。

林紘についての一般的な認識は、つぎようになる。

林紘は、200種にのぼる外国作品を漢訳した中国の著名な翻訳者である。ところが、外国文学を中国に紹介したこの先駆者は、五四時期には文学革命の反対者にまで落ちぶれてしまった。しかも、彼が翻訳で行なったことのひとつは、戯曲を小説に書き換えることだった。それほどまでに杜撰なことをしていたのだ。あまりの意外さから尊敬が一転して侮蔑嘲罵に変化したものかと思う。

だが、鄭振鐸はもともとが文学革命派のひとりではないか。見方によれば、これを偏向しているというだろう。その彼が述べることを無批判に検討することなく受け入れていいのだろうか。普通に出てくる感想だ。また、戯曲を小説に訳し直すという作業は、それほど簡単なものなのか。少し考えればその奇妙なことに気づく。

どこか腑に落ちない気持ちがつづいていたことは確かだ。

文学革命派の敵対者として林紘が特別に指名された。敵として指名をした側の鄭振鐸が、1930年代には当時を回想して文学状況についての概説を書いている。往時において敵対者であった林紘である。敵としての位置が変更されることはない。文学革命派にとっては、林紘は軍人と結びついた強敵だった、と彼の死後も説明されている。その林紘が外国の文学作品を翻訳するにあたって原作の戯曲と小説の区別をつけることができなかった。中国の知識人が、文学上の分野について無知であるというのだ。守旧派の老人だからなのか。外国語を理解しなかったからなのか。筋が通っているような説明だが、どこか不自然だ。私はそう感じる。だが、鄭振鐸の論文が公表されて以後、すべての研究者が漢訳の誤りを指摘し、文学革命の反対者として林紘を認定している。中国大陸、香港、台湾、日本そのほかという違いがない。

奇妙だと思うのだが、明解に説明することはできない。私の意識の上ですっきり

しない状態が生じる。自然に、頭のすみのほうでいつも考えていたのだろう。

その瞬間についてだけは、今でもはっきりおぼえている。

シェイクスピアの「歴史劇」ということばが脳裏にふと浮かんだ。「小説化本」プラス「歴史劇」である。これから説明します。

林訳シェイクスピア研究における前段階が「小説化本」である。つづく後段階が「歴史劇」だ。

前段階からお話ししよう。

林訳シェイクスピアには、英文小説化本があるのではないか。この考えにそって調査を進めていた。

林訳シェイクスピア

林訳シェイクスピアについて復習しておく。

流布するシェイクスピア作品は、いうまでもなく英語で書かれた戯曲だ。そのなかの「ジュリアス・シーザー」などについて、林紘は英語の原本にもとづいて小説体に変えて漢訳した。これが、定説であり林訳批判の根拠になっている。原作戯曲の「小説化 novelization」とよんでいる。

林訳シェイクスピアといえば、あの有名な『吟辺燕語』(1904)がある。底本がラム姉弟の『シェイクスピア物語』であることは、広く知られている。現在では、とつけ加える必要があるかもしれない。

劉半農の林紘批判にはじまる。

錢玄同が架空の人物王敬軒になりすまして捏造論文を書き林紘を称賛する。それに対して劉が徹底的な批判を加えるという「なれあいの手紙」である。あまりにも有名だ。1918年に公表された。中国現代文学史では、わかりやすく表現すれば「やったねッ(笑)」という感覚で称賛されている。

事実、最近でもつぎのように説明している研究者がいる。「のちにこのなれあい芝居は、現代文学史において人々が好んで話すおもしろい逸話になった〔後來這出双簧戲在現代文学史上成了一件人們樂談的趣事軼聞〕」*4

林紘批判はあまりにも当然だから、立論の基盤を疑うという考えは、もとからない。攻撃目標にされた林紘は、標的として存在するだけ。視線を少し上にずらしてながめれば、生きている林紘が見えるはずだ。しかし、文学革命派の側に完全に立つその著者は、視点を動かす必要を感じていない。書かれた表現の上等ではない感

覚に私は目をそむけそうになる。「文学革命」に気品の高さを求めるのはお門違いだと充分に理解はしているつもりだが、書かずにはいられない。だからこそ文学革命というか。革命にはなんでもあり、だ。当事者でなくても、文学革命側につく人間は、何を書いてもなにをやってもお咎めなしである。そう公認されている。

劉は林訳『吟辺燕語』を例にあげ、詩と戯曲の区別がつかないという。奇妙な説明だと思う。『吟辺燕語』の存在を頭においてわかりやすく書けば、林紘は戯曲を小説に変えて翻訳した、という意味である。翻訳で有名な林紘であるが、その翻訳そのものに大きな欠陥があると劉半農は指摘したのだった。

たしかに翻訳にはシェイクスピアの名前が表示されているだけ。ラムの名はない。見れば戯曲が小説になっている。林紘が勝手に小説化したと劉半農は思った。まさかラム姉弟の『シェイクスピア物語』が底本だとは考えなかったらしい。

それにしても、劉は本当に知らなかったのだろうか。あるいはラム姉弟の原作であることを知っていてそう批判したのか。劉半農が林紘を批判するために書いた文章だから、事実などどうでもよかったのか。そうだとすればおかしな論拠ではある。今となつては、詳しい事情はわからない。誰も劉半農の誤りであったとは言っていないのだ。当時、それについて説明する人もいない。

さらにいえば、林紘も反論しなかった。誤解してはならない。反論できなかったわけではないのだ。文学革命派からの批判は無視するのが林紘の考えだった。劉半農の林紘批判は、訂正のないまま認められて現在にいたっている。これも不審な点のひとつになる。ここでいう不審とは、研究者はなぜこれを劉の間違いだと指摘しないのかという意味だ。理解していてもそれを書くことができない事情でもあるのだろうか。

次に鄭振鐸が登場してダメ押しをする。

彼は、林紘批判の構造は維持しながら、劉半農が林訳を酷評する根拠としてかかげた林訳作品『吟辺燕語』を知らぬ風をよそおって取り下げた。そうして何をしたか。シェイクスピア作品「ジュリアス・シーザー [凱徹遺事]」などにすり替えたのである。そのうえで、戯曲を小説にして漢訳した、戯曲と小説の区別がつかない、と林紘を重ねて非難する。鄭振鐸が林紘の死後に公表した「林琴南先生」*5と題する専門論文において展開した。1924年のことである。鄭振鐸が行なったことは魔術ではなく、すでに芸術の段階にまで到達している。

のちの研究者は例外なく鄭振鐸に追随した。

その理由は、わからないわけでもない。鄭は、1924年当時、商務印書館に勤務していた（1921-1931年在籍*6）。該書館の重鎮である高鳳謙（夢旦）の娘婿だ。林訳は、その多くが商務印書館から刊行されている。ゆえに、鄭は商務印書館の内部資料を利用して林訳についても説明した、と誰でもがそう考える。ほかならぬその鄭振鐸が、林訳を批判して戯曲を小説に書き換えたというのだ。そのことばを信じるのが普通だ。だから、当時、林訳を独自に調査する気になった人は出現しなかった。鄭振鐸の文章は、のちの論文集などにも重ねて収録された。彼は、林訳研究の権威だと皆から認められたのである。そうでなければ、誰かが鄭論文を批判的に検討したはずだ。権威と認められるとその検討をする必要がなくなる。たしかに、鄭振鐸の文章を紹介し引用する研究者はいる。だが、彼の論文そのものを対象にして検証した人はいない。やはり研究の権威なのだ。

だが、現在は、林紓らが翻訳したのはラム姉妹の『シェイクスピア物語』だと広く知られているではないか。その延長線上に「ジュリアス・シーザー」ほかの戯曲をおけばどうか。こちらだけはなぜ小説体に変更したのか。どうもじっくりこない。そう思うのは私だけだったらしい。

林訳研究の専門書、翻訳目録、あるいは文学史など手元にあるものはできるかぎり見た。しかし、皆が鄭振鐸説にもとづきそれぞれが林訳非難をくりかえしている。私が所蔵する書籍は多くはない。少ないから例外がないのか。それにしても研究者たちは、鄭の使用する語句を直接引用したり言い換えたりしているだけだ。彼らのほとんど全員が、林紓批判の列に加わって罵倒しつづけている。

日本のある中国話劇専門家は、「林紓はさらに、『ヘンリー四世』などを直接翻訳したが、これらはすべて小説体で訳されており、シェイクスピア作品の翻訳とは認められてはいない」*7と説明する。「直接翻訳した」と書いて、林紓がシェイクスピアの原作にもとづいていることを強調している。これを見ると、出典が書かれているわけではない。その中国話劇研究者は、独自に原本で確認したうえで断言している。誰もがそう思う。専門家が書いていることだから「正しい」のだろう。林紓がシェイクスピア戯曲を小説体で翻訳したのは動かしようのない事実である。

林訳の欠点をあげる研究者のすべてが、林紓による戯曲の小説化を指摘し批判し大声で罵る。翻訳界に多大の貢献をしたと林紓を高く評価している研究者ですら、シェイクスピアとイプセンの戯曲については小説化したことを否定しない。

林紓は、『吟辺燕語』に限ってラム姉弟が小説化した版本を底本にしたのか。な

らば、逆にこの翻訳作品の方がほかとは異なる。

それにしても、よくわからない。なぜ、『吟辺燕語』だけに英文小説化本の底本があるのか。それ以外の作品については、原作の戯曲をわざわざ小説体に変えたのはどうしてなのか。だからこそ、林紘は戯曲と小説の区別がつかない、と劉半農、鄭振鐸らは嘲笑し罵った。だが、普通に考えて、そういうことがありうるだろうか。中国の知識人が、よりもよって戯曲と小説を取り違えるだろうか。区別がつかないと考える方が奇妙である。劉鄭は、林紘を罵って中国知識人の水準の低さを強調したかったのか。どこかが異様だ。もし小説体に変えたのであれば、その理由を、あるいはその意図を説明してもよさそうなものだ。だが、解説が不足している。

ここまでくると思考の堂々巡りになってしまう。文字通りくりかえすのみ。結論は見つからない。

ひとくちに小説化するといっても、実際に翻訳をする段階では、かえって手間がかかるのではないか。戯曲のままに漢訳する方がよほど楽だろう。私は素朴にそう感じる。この疑問が私の頭のなかで生まれた。鍵語は「小説化本」である。だが、すぐに忘れるのが普通のこと。備忘録に書きつけているわけではない。

林紘が原作の戯曲を勝手に小説化したという従来の説明、つまり定説について考えれば、その不合理で説明のつかない部分のほうが多いように思う。ところが、目を通した文献（限られたものであるのはいうまでもない）のすべてにおいて、林紘は戯曲を小説化した、と説明されている。80年をこえるほどの長期間にわたってくりかえされているこの説明が、私を圧倒する。私の感じ方のほうがおかしいらしい。自分の勉強不足を痛感するのだ。

林紘は原作の戯曲を小説化して翻訳した。これが定説だから疑いようがない。そうではないか。しかも、私の乏しい知識では、シェイクスピア原作を小説化した単行本といえばラム姉弟の作品しか思い浮かばない。ラム姉弟関係の文献を付け焼き刃的に読んで、彼ら以外にシェイクスピア戯曲を小説化した人がいるなど、どこにも書かれてはいない。この段階ではそうだった。ラム姉弟しかいなかったというわけでは必ずしもなかった*8。だが、それが判明したのはあとのことだ。これについてはすでに文章に盛り込んである。うすうす感じたのは、児童向けに書き直された作品は、それだけで英文学研究者の研究対象にはならないという事実だ。

腑に落ちない。今まで幾度も体験している。どこかおかしいと感じていてもそれに証拠を提出して反論することは簡単ではない。その多くは、腑に落ちないままに

記憶からなくなってしまう。うまく証明できることは滅多にないのだ。あるいは、疑問に感じる自分の感覚がおかしい。誰もが認めているから定説なのだ。定説が正しいにきまっている。自分の認識不足に違いない。もっと勉強しなければならない。最後はそこに落ち着く。

疑問に思うところがあれば、それを解明したいと考える。論文を書く前には資料を集めていろいろな可能性をさぐる。それ以外には方法がない、といているのではない。これが私のやり方にすぎない。先に結論があって、それに合わせて資料を取捨選択するというような器用なまねは私にはできない。

資料がふえれば、それらの問題を合理的に説明するための考えがいくつか出てくる。それをさらに資料をさがして検討することになる。思いつきはしても、資料の裏付けがある確かなものになることは、今までの経験からいっても多くはない。

こう考える方が合理的だ。前後の脈絡からして、そう説明すれば納得がいく。しかし、それを証明する資料はみつからない。いくら合理的だと考えたところで、出てきたひとつの事実がそれまでのすべてをひっくりかえすことがある。このくり返しである。いってみれば、その過程が苦しい。あるいは、その苦しさを楽しむ。

一定の方向に筋道がたったところで論文の執筆を開始する。短い論文であれば、結論を得てから執筆にとりかかる。だが、問題が比較的大きく時間がかかるばあいは、おおまかな論旨にもとづいて調査をしながら書くことになる。結論が出てから書けばいい(今、公表するかどうかは問題ではない。論文という形にする途中のことをいっている)。そういう意見はある。だが、わかった部分を文章にしていくことが重要だ。書けば問題がより明確になる。読み返すと説明が不足している部分に自分で気づく。そこを補強する資料をさらに探すという順序になる。書くという作業の重要性を強調しすぎることはない。いくら頭の中で考えて問題が解決したように思っても、実際に文章にしてみると成立しないことがわかるのはしょっちゅうだ。ごくたまに、細かく調べていくと、最初には予想しなかった展開になることがある。より深化して新しい局面が出現するばあいは自分でも意外に思う。いっておかなければならないが、そういう幸運にめぐまれることはマレである。

林訳シェイクスピアについては、その数少ない例であるということができらう。自慢しているわけではない。「小説化本」という鍵語で作業をつづけていた。ただし、これは前段階である。さらに後段階が出てきたので驚くことになる。まず、前段階から説明する。

前段階「小説化本」

前段階の「小説化本」というのは、定説である林紘による小説化も含まれている。だが、それだけではない。

たしかにラム姉弟の『シェイクスピア物語』は、戯曲を小説化した単行本だ。林訳『吟辺燕語』は、そのラム姉弟の英文小説化本を底本にした。では、なぜ『吟辺燕語』だけに英文小説化本があるのか。どうしてもそこに戻っていく。ならば「ジュリアス・シーザー [凱徹遺事]」などにも同様に英文小説化本があっても不思議ではない。そうではないか。

周知のように、林紘は外国語ができなかった。翻訳者が口述するのを聞きながら林紘が古文で筆記する。くり返して恐縮だが、これが彼の翻訳方法である。誤訳、削除などが発生するのは避けられない。

しかし、もとの戯曲を小説体でわざわざ翻訳するだろうか。翻訳者が口述したセリフを林紘が小説体に変換するのだろうか。シェイクスピア原作と林訳を比較対照して小説化という事実が浮かび上がってくるのだろうか。この小説化には、原作には存在しない説明を含むのか。その説明部分は林紘による創作なのだろうか。謎が深まる。どこかおかしい。小説化本……

気がついてみると頭の中では「小説化本」ということばがグルグルまわっている。どこかで同じ体験をしたことがある。

昔のことだ。あれは、呉趼人「電術奇談」の原作を探索していた時だった。

図書館で『大阪毎日新聞』の原紙を調べていた。目的のものがみつからず、時間が経過して疲労がたまった。気がつけば頭のなかで「清末小説」という単語が浮遊している。あのときは、日をあらため場所を変え、使用資料もマイクロフィルムに変更しさらに探索の範囲を絞って、もういちど調べなおした。それでようやく菊池幽芳「新聞賣子」を突き止めたのだった。これこそが呉趼人「電術奇談」の原作である。今では、誰でも当たり前のように「新聞賣子」だと書いている。苦勞のしがいがあったというものだ。

ラム姉弟『シェイクスピア物語』と同様に、彼らとは別の作品を英文小説化した人がいるのではないか。イギリス人、あるいはアメリカ人が原作の戯曲を小説化しているかもしれない。これが思いつきだ。林紘が勝手に小説化したと考えるのではない。だから、もうひとつの「小説化」である。

この発想にもとづいて作業を続けていた。具体的にいえば、*Tales from Shakespeare* に似た書名でラム姉弟以外の人が執筆した英文小説化本を集めることだ。

探してみても意外なことを知った。かなりの数の人が小説に書き直している。これは予想していなかった。そのことを紹介する文章を見かけなかったからだ。意外だと感じるくらいに私が無知だったといってもいい。あとから知ったことだが、児童文学関係の書籍では言及があった。そういう扱いらしい。

いくつかの版本を手元にたぐり寄せた。*Stories from Shakespeare*、*The Shakespeare Story-Book*、*All Shakespeare's Tales* などだ。書名は同じだが作者の異なる別物もある。まぎらわしい。それでも9種類では不足だと見え、いずれも林訳とは一致しない。私が求めている小説化本ではないのだ。ラム姉弟が選択したのと同じ戯曲を独自に小説化しているものがほとんどである。たまに「ジュリアス・シーザー」などが含まれているにしても、目的のものではない。原文を対照してみれば林訳とは無関係だとわかる。調査が暗礁に乗り上げた。こういうばあい、探索計画は成果をあげないまま中断してしまう。

後段階「歴史劇」

旅先のホテルでのことだった。観光旅行だから街を散策する以外は、持参の本を読む、テレビを見るくらいしかやることがない。自宅にいれば周りに雑用があふれていてそんな考えも出てこなかった可能性もある。環境が日常とは違っていた。だから、それまで進めていた林紆についての再評価問題を、頭の中で無意識に反芻していたらしい。

自分で書きながら「らしい」というのは奇妙か。いや、私のばあいは実験をしているのではない。経過記録を書きつけるという習慣はないのだ。思いつきは、突然にわいてくる。だが、何も無いところからは出てこないはずだ。そこを説明したいのだが、記憶があやふやになっている。

旅先で思いついた「歴史劇」とは、こうだ。

シェイクスピア劇には喜劇、悲劇、史劇があったのではないか。これに関する私の知識はまったく貧弱で恥ずかしい。それまでラム姉弟に関連して読みかじったものにすぎないからだ。ラム姉弟が(区別は厳密ではないが)歴史劇を除いて小説化していたとすればどうなる。追究する重点を歴史劇に置いてみる。では、history、historic、historical という単語(これもいいかげんな連想だ)が英文小説化本の書名

についているのではないか。あっているかどうかはわからない。これが思いつきであり、手がかりにもなる。可能性があると思えば調査に着手しても失敗するのが普通だ。このくり返しであると再度いう。

林紓が底本にした英文小説化本を引き続き探索する。「歴史劇」という鍵語は調査の可能性を高めると同時にその範囲を絞ることもなった。

帰宅して電脳をインターネットに接続する。以前の研究環境と異なるのは、インターネットを利用できることだ。

本当に手を焼くのは英文原作の探索である。ふたつの意味があって、手順といいなおしてもいい。

ひとつは、上に述べたようにある目的にそった作品を書物群の中から探し出すこと。もうひとつは、目的の書物そのものを入手することだ。

現在の状況が変化していることを説明するためには、以前の有様をいわずに書かない。研究者ならば誰でもがやっていることにすぎないが、あえて書くことにする。清末民初翻訳研究を行なっている研究者は少ない。その人は探索の技術をすでに知っている。だが、大多数の人は、それについて興味もないだろう。中国文学研究にも、すでに昔とは異なった研究環境が出現していることを紹介しよう。

原本入手の手順

清末民初翻訳小説研究において、まずやらなくてはならない大きな課題のひとつは原作の特定だ。有名な作家のばあいは、それを省略することができる。それでも、全部の作品に作者名が明示されているとは限らない。

何をいいだすやら、と思われたはずだ。翻訳には原作者と原作品があるにきまっている。

いうまでもなく、いや、驚いたことに、と書いたほうがいいのか。清末から民初時期にかけての中国では、原作者、原作品を明記しない翻訳作品が多い。現在から見ればおかしいことかもしれない。だが、これが実際のありさまだ。「翻訳」とうたってある作品はまだいいほうだ。それすら明記されていないものは、誰が見ても創作だと思う。ところが、これが翻訳だったりする。その状況は、複雑のひとつにつける。だからこそ、この林紓問題がある。

あるいは、中国の研究者は多数にのぼるから、原作に関してはすでに調査を終えているだろうと思われるかもしれない。だが、残念ながらほとんど手つかずの状態

である。中国近現代文学の研究に空白の分野があるなどとは、想像もできないだろう。しかし、これがまぎれもない現実なのだ。

まず、原作がなにかをさぐる必要がある。それだけでは不十分だ。翻訳の際に利用した底本についての吟味が必要になる。初版から再版まで、あるいは出版社が違って発行されているばあい、それらのなかのどれが底本になったのかを突き止めなければならない。版本によって本文が異なっていることがある。底本とは違う版本をもとにして、漢訳の誤り、削除、加筆を指摘することはできない。そこを無視して立論しても、意味を持たない。以上は、清末民初にかぎらず翻訳研究では当たり前前の作業について言っている。

いうだけなら簡単だ。しかし、実行するとなると困難がつきまとう。

たとえば「アラビアン・ナイト」がある。

漢語では「天方夜譚」あるいは「一千零一夜」と翻訳される。2種類の漢訳書名があるということは、異なる訳本が多数存在していることを暗示する。なにしろ、フランス語訳本から英語に重訳された数が桁違いに多い。それに児童向きに書き換えられた版本を含めるとほとんど意識を失うくらいにその種類と数はふくれあがる。そのジャングルの中に突入しようと思う中国の研究者はほとんどいなかった。現在も、いない。多数の英訳原本を見る機会が中国にはある、と考える方が現実的ではない。

だからこそ、漢訳「アラビアン・ナイト」の研究は進んでいない。それぞれの漢訳がどの系統の英訳本にもとづいたのか、それに言及する文章は中国では書かれたことがないのだ。たまたに底本を明示していることもある。しかし、調べてみれば間違っている。わかってみれば簡単な理由だ。漢訳の序文に書かれた誤った底本を、調べもせずに引用しただけ。

私の『漢訳アラビアン・ナイト論集』（2006）が存在する意味は、まさにここにある。遠回しな書き方になってしまった。拙著は、漢訳が底本とした英訳本の系統を明らかにしながら記述したといたいのだ。

中国における翻訳研究は、接近の方向にふたつがある。

ひとつは、中国文学研究者が翻訳を研究する。ただし、中国の中国文学研究者は、基本的に翻訳には手を出さない。そのなかにあつて郭延礼は、精力的に論文を発表している。その成果に私は敬意を表する。だが、林訳シェイクスピア、林訳イプセンについては、彼も鄭振鐸による定説から自由であったわけではない。

ここ数年は中国の研究界に変化が起こっていることはたしかだ。外国語を理解する若手研究者が登場している。しかし、研究者の数は、やはり少ない。翻訳は中国文学ではない、という考えが古くから存在しているのが原因か。急いでつけ加えると、それでも日本に比較すればかなりマシだ。自国の文学研究だから当然だといえようなのだ。

もうひとつは、中国人の外国文学研究者が自国の翻訳を研究する。

ただし、彼らは、対象の外国文学そのものを研究することに主力をそそぐ。彼らが漢訳に言及することは、まったくないということはないが、少ない。だから、郭延礼から、先行文献を十分に調査するように、と彼らにむけて苦言が呈されることになる。つまり、郭延礼の意図をひらたくいえば、外国語を理解していても中国の翻訳研究という分野には暗いという意味だ。

以上の理由によって、清末民初翻訳小説研究が空白になっている。

さて、大量の書籍の中からどうやって林紘らがもつづいた1冊の版本を探し出すのか。

以前、私が利用していた目録はごくわずかだ。英国図書館とアメリカ議会図書館の蔵書目録である。実物の記録だから確かに手がかりになる。だが、万能ではない。著者が判明している書籍をさがすことはできる。しかし、書名が不確かなものになるとほとんどお手上げ状態になってしまう。あいまい検索などもとから想定していない目録なのだからしかたがない(あくまでも紙媒体についていっている。目録が電子化される以前のことで。現在は違う。誤解のないように)。

とりあえず、それらしい書名がわかったとしよう。原物をどのように入手するか。これが次の段階だ。

日本の図書館蔵書目録を見るのは手間がかかるうえに成功率は高くない(これもインターネットが普及する前の話)。洋書専門店で注文を出しても、1年以上の時間と相応の費用がかかる。今見たいという要求がかなえられることは最初からあきらめなければならない。そもそも、書名も作者も不明である作品を注文することはできない。

そのような状況では、研究を進めることはむづかしい。だから、清末民初翻訳小説の研究に手を出す人は少なかった(例外のひとりでは中村忠行だ。日本文学を基礎にして中国の翻訳小説研究に取り組んでいた)。どう考えても投入する労力のわりに成果が期待できない。なるほど、こう書きながら私は理解した。鄭振鐸の文章が林訳研

究の権威になる理由だ。鄭説を検討しようにも原本そのものを見る機会が少ない。批判的に検討することができなければ、従うほかない。

研究の競争が激化している現在では、中国文学研究といえども悠長なことをいってはいられない。研究成果をだすことが要求されている。目に見える結果がすぐに得られる可能性が少ない分野は、やはり後回しになるだろう。

それとは別に以前とは様子が違ってきたのは、現在はインターネットがあるからだ。翻訳文学の研究環境が大きく変化した。

世界中の大学図書館、研究機関が所蔵目録を公開しはじめている。そればかりか古書店も進出してきた。利用価値が高いのはこちらの古書店ネットだ。

外国書籍であれば著者名、書名を入力する。すると加盟している複数の古書店が出品しているバージョンが表示して一覧表になって表示される。適当なものを選択して電腦のキーを押すだけで原本が郵送されてくる。図書館に複写を依頼するよりも、原物を入手するほうが研究に役立つ。なによりも助かるのは、あいまいな表記でも鍵語検索にかければ関連書籍を表示することだ。さらには、原文の一部を入力すると該当の書籍が検索できる状況も出現しつつある。インターネット全体がひとつの巨大な索引になっている。便利でないわけがない。研究の形態が一変するはずだ。

林訳シェイクスピアのばあい

林訳シェイクスピアで、しかも「歴史劇」だと予測した。単語をいくつか組み合わせさせて検索をくりかえす。最終的に出てきたのが、A・T・クイラー＝クーチ A. T. Quiller-Couch 『シェイクスピア歴史物語 Historical Tales From Shakespeare』（1899）である。原文と比較対照してみれば、これこそが林訳の底本だった。

林紓は、クイラー＝クーチの英文小説化本を底本にした。ゆえに漢訳が小説体であるのは不思議でもなんでもない。戯曲を小説に書き直した、と鄭振鐸が林紓批判をおこなった根拠が完全にくずれた。鄭は林に無実の罪を押しつけた。これはまぎれもない林紓冤罪事件である。

私が林訳の底本に到達することができたのは、試行錯誤の結果であると言いつけておく。10種類以上の版本を集めなければならなかった。だが、逆にいえばそれだけの数でよく合致するものが見つかった、という考え方もできる。これこそ偶然の幸運か。どちらにせよ、そう簡単には結論は得られない。問題が解決したからよ

かったものの、普通は結論には到達しないままで中断することの方が多くとくり返す。

私がクイラー＝クーチの小説化本の初版と重版の合計2冊を入手したのは、それを自分で念押ししたかったからだ。

誤解が生じるかもしれない。インターネットを利用すれば、なんでも可能か。そんなことはない。私は確かにクイラー＝クーチ版をインターネットを使って探してみた。しかし、インターネットを利用しているのは私だけではない。ほかの研究者も使っている。なぜ、その人にはできなくて、私にはできたのか。それは、私が林紘について考えつづけていたからだ。そこを勘違いしてはだめです。

では、インターネットのなかった時代では、クイラー＝クーチの小説化本を知らなかったのもしかたがなかったか。それもおかしい。知らなかったから林紘を批判するのは許されるのか。なにやらなつかしいスローガンめいてくる。愛国無罪、造反有理、革命無罪か。知らなかったからといって、劉半農、鄭振鐸ら、あるいは今までの研究者が免罪されるわけではないのだ。

インターネットについてももう少し説明する。

今のところ書物検索には便利である。研究資料を収集するばあいの手がかりを提供してくれるという点で、大いに利用する価値がある。

だが、これだけはいっておかなくてはならない。インターネット上には「新しい発見」は存在しない。

どんな論文であれ、インターネットで公表された瞬間に、「新しい」という形容詞がはずれてしまう。単なる古い「発見」の事例となる。また、他人の「新しい発見」ではあっても、自分とは関係がないものなのだ。だから、いくらインターネット上の情報をながめたところで論文を書く発想にはむすびつかない。少なくとも私はそうだ。

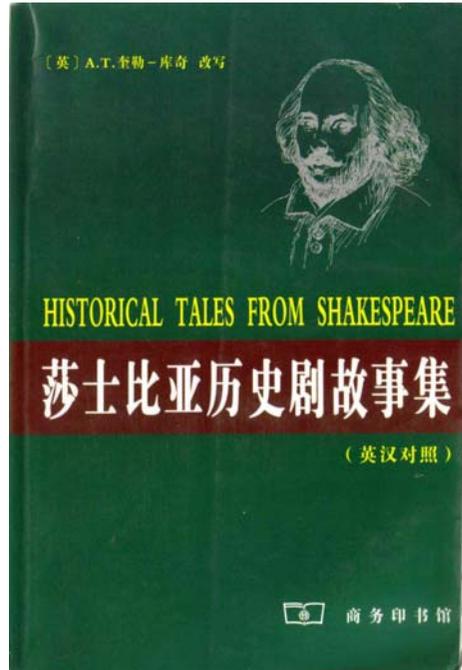
逆にいえば、自分の考えが「新しい発見」かどうかを確認する手段としては有用であるといえる。インターネットに内容の類似するものが掲載されていれば、それはすでに「新しい発見」ではない。自分の名前を出して発表する必要のない部類に属してしまう。つまり、文章にしてはならない。他人の「新しい発見」を引用しただけでは自分の発見になるわけがない。

インターネットで検索しても出てこない情報こそが重要になってくるという意味でもある。

クイラー=クーチの英文小説化本が林訳の底本であったことを確認した。



『莎士比亚历史剧故事集』1981



『莎士比亚历史剧故事集 (英汉对照)』2001

ところが、なんと中国では該本が漢訳出版されていたのだ。中国におけるシェイクスピア研究と翻訳を紹介した文章のなかに見つけた。林紘の翻訳に比較してずっと後代であるとはいえ、これを見逃すわけにはいかない。

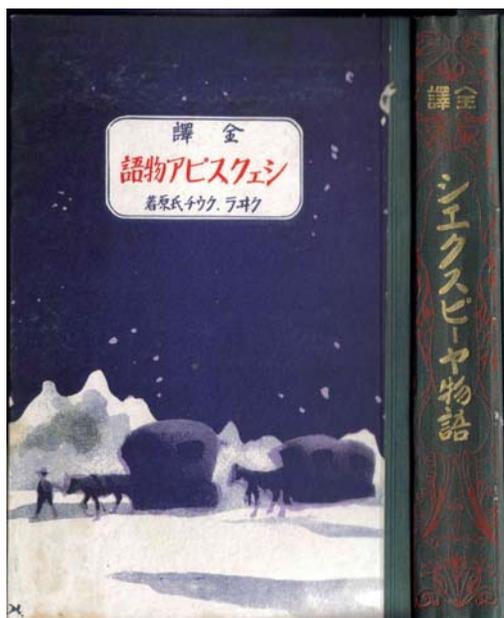
奎勒-庫奇改写、湯真訳『莎士比亚历史剧故事集』（北京・中国青年出版社1981.3）である。

クイラー=クーチ版が林訳の底本だと判明したあとのことだから、私の目に入ったといえるかもしれない。それ以前だったら、気づかなかった可能性もある。該書に解説があるとして、林訳に言及していれば、私を含めて認識が不足していたことになるだろう。林訳の底本であると説明していなければ、林紘冤罪事件である可能性がますます強まる。

湯真の訳本は、すでに入手困難になっていた。しかたなく、所蔵する機関を調べて部分複写を取り寄せた（後日、湯真訳本そのものを入手。写真に掲げたのがそれ）。たしかに、クイラー=クーチ版の漢訳である。

湯真の「訳者前言」を読む。蕭乾より原書を贈られたと書かれている。蕭乾はラム姉弟の『シェイクスピア物語』を漢訳しているからその関係で該書を所蔵してい

たのだらう。



『シェイクスピア史劇物語』1927

湯真は、自らが翻訳したクイラー＝クーチ版が林訳の底本であることにはひとことも触れていない。

言及がないというのは、どういうことか。林訳シェイクスピアの底本に使用されたことを知らなかった証拠になる。さらには、原書を所蔵していた蕭乾も、その事実気づけなかった。

蕭乾著、丸山昇、江上幸子、平石淑子訳『地図を持たない旅人』上下（花伝社1992.11.20、1993.2.25）を読んでいたのを思い出す。シェイクスピアについて記述があったかどうか、記憶にはない。その時は興味がなかったから忘れたのかもしれない。念のためさがすと、該書の片方がどうしても見つからない。あらためて書店から取り寄せたのは、蕭乾がクイラー＝クーチ版について触れているかどうか確認するためだ。言及はなかった。蕭乾が該書で述べたかったことはそんなことではない。言及がないのも当たり前だろう。

のちに漢訳クイラー＝クーチ版がもうひとつあることを人から教えてもらった。湯真ではない別人の漢訳だろうと思ったのは、たしかに私の早とちりだったかもしれない。

手元に届いたのが（英）A.T.奎勒-庫奇改写、湯真訳『莎士比亚歴史劇故事集（英漢対照）』（北京・商務印書館2001.2）である。

同じ湯真訳本だったのは意外だった。当然ながら、林訳については言及がない。ただ、クイラー＝クーチの英文と対照してあるのが珍しい。この英漢対照版がなにを私たちに教えてくれているかといえば、つぎのことだ。探そうと思えば、中国にクイラー＝クーチ版の原文は存在していた。原本ではないが、英文は読むことができるという意味だ。私が、欧米の古書店から手間ヒマかけて原本を取り寄せるまでもなかったことになる（それでも私は実物を注文したと思うが）。手がかりは、近くに存在していた。ただし、そのことに研究者の誰も気づかなかった。そういう書籍があるという想像すらしなかったのだ。気づかなかったのも当然だということになる。

漢訳の表紙を掲げたから日本語訳本もあることを示しておく。クヰラ・クウチ氏原著、通俗図書刊行会著『シェイクスピア史劇物語』（大盛堂書店1927.10.15（表紙は「全訳シェイクスピア物語」））だ。

林訳よりは遅いが、湯真訳よりもほぼ半世紀も前に刊行されている。

林訳イブセンのばあい

林訳シェイクスピアであることならば、イブセンにあっても不思議はない。可能性は高いと思った。『吟辺燕語』、あるいは「凱徹遺事」などと同じことをくり返していただろう。つまり、イブセンの英文小説化本があると推測した。前例が、それも複数見つかっているのだから、こちらは比較的容易に思いつく。

当時の中国でノルウェー語を理解した人がいたかどうかは知らない。林紘の共訳者は多くが英語かフランス語を理解した。それからの連想だから英語の版本になる。

古書店の目録を見て注文したのが、ドレイコット・M・デル Draycot M. Dell 著『イブセンの「幽霊」物語 IBSEN'S "GHOSTS" Adapted as a Story』（1920）である。

最初この英訳版本を見たとき、はずれたと思った。なぜなら、イブセンの戯曲とはまったく異なった書き出しになっているからだ。舞台はパリだ。画家たちが登場して共同生活をしている。いや、まてよ、パリからはじまるのは林訳イブセン『梅孽』そのものではないか。

林紘は、複数の人物がパリで生活する部分を創造した。林訳イブセンを批判した鄭振鐸によればそうなる。イブセンの原作にない部分が漢訳にはあるのだから鄭はそう考えたのだ。

だが、これは鄭振鐸の間違いである。彼は、林紘シェイクスピアについて犯したのとおなじ誤りを林紘イブセンについてもやってしまった。イブセン戯曲にも英文小説化本があったのだ。鄭は、十分に調査することなく根拠もないのに林紘を批判し痛罵したのである。林紘を批判することがさきに決められていたと思われる。ゆえに、地道に底本を探す気など鄭振鐸にははじめからなかった。

どうしても、そこに筆が行ってしまう。

より大きな問題　　林紘冤罪事件の全体構造

問題は、林紘シェイクスピアと林紘イブセンで終らなかった。

頭のなかのどこかで無音の警報が鳴っている。そんな気分だ。シェイクスピアとイブセンについて林紘は、劉半農と鄭振鐸によって濡れ衣を着せられた。

ここに、ある疑問が普通に出てくる。林紘は反論しなかったのか。そう、彼は反論しなかった。

ひとつは、劉半農が『吟辺燕語』を持ち出したときだ。林紘は、錢玄同と劉半農による「なれあいの手紙」、私のいう捏造論文そのものを無視した。もうひとつ、鄭振鐸の批判には、死後のことだからもとより林紘は反論することができない。

では、林紘の共訳者はどうか。魏易、陳家麟、毛文鍾らは、底本にした英文小説化本を知っている。まさに当事者なのだ。だが、彼らが反論したという記録は今のところ出てこない。もし、あれば後の研究者の誰かが言及するのではないか。諸資料を読んでも、その気配さえもない。

翻訳についての事情はそうだ。だが、林紘が押しつけられた無実の罪はそれだけで終りであろうか。

1919年の五四事件直前に林紘は何を行なったか。

周知の事柄だといってもいいだろう。林紘は「武力による北京大学抑圧を促していた」といわれる。だが、具体的にあげられるのは、短編小説2篇と北京大学校長蔡元培にあてた手紙くらいのものだ。つまり、文章を発表して文学革命に反対した。林紘は、武力による抑圧と文章の発表を同時に並行して実行していたと理解されている。

誰が、そう説明するのか。驚いたことに鄭振鐸本人なのだ。

しかし彼（林紘）の道を守り文を「正す」という情熱は、別の方面に出口を

見つけた。彼は新聞紙上につづけて2篇の小説を書いた。ひとつは「荊生」で、もうひとつは「妖夢」だが、ふたつとも意味は同じだった。侠客を望み、鬼神に託するというだけ。しかも彼はある「外力」が、この新しい運動を制裁し屈服させることを望んでおり2篇ともに一致した精神なのである。罵りだけでは終らず、つづいて呪いになった。^{*9}

鄭振鐸こそが、シェイクスピアとイブセンの漢訳について林紘に濡れ衣を着せた張本人ではないか。その彼が、林紘を批判して「外力」つまり軍人（劉半農によると徐樹錚を指す）の出勤を望んでいたと説明するのだ。おかしくはないか。

考えてみれば、五四時期の文学運動について記述するとき、よるべき文献資料というのがほぼ決まっている。そのひとつが『中国新文学大系』（上海良友図書印刷公司1935.10.15。上海文藝出版社影印2003.7）のそれぞれにつけられた「導言」だったりするのだ。これも奇妙だろう。文学革命派の当事者が編集した書物は、疑いもなく文学革命派の視点で当時の状況を説明している。文学革命派から反対派の代表者に指名された林紘には、最初から敵対者としての位置しか用意されていない。片方からの視点のみによって説明するのは、普通、偏向した論断だという。この一方的な記述しか存在していないのが、中国現代文学研究界の実態なのだ。

林紘批判の構造、つまり林紘冤罪事件の全体構造が見えた瞬間に論文はできあがったも同然であった。

五四事件直前にくりひろげられた北京大学をめぐる風説風聞を追跡する必要がある。ウワサが林紘と結びつけられて説明されるからである。

ウワサと事実を検証する作業に入った。

これをはじめると必然的に陳独秀が登場する。

陳独秀が『毎週評論』で展開し説明した新旧思潮の対立は、自分につごうのよい情報ばかりを取捨選択して成立していることが判明する。考えれば当たり前だ。陳独秀は、筆1本の評論家ではない。政治運動を実行している実践家だ。自分の主張を広めるための根拠として情報を収集している。自分にとって不利で不必要な情報は捨てるに決まっているではないか。活動家が普通にやることだ。自分たちが守旧派保守派からいかに攻撃されているかをしつこく主張する。だから陳らがそれに攻撃するのは正当な行為になる。陳独秀の編集した文献にもとづけば、その視点は自動的に文学革命派に固定される。研究界では、その線に沿った論文が大量に書かれ

ている。陳独秀が排除した文献について、なぜ検討しようとししないのか。これに陳独秀の私生活がからんでくるから事情は複雑である。

それだけにとどまらない。林紘が北京大学校長蔡元培にあてた手紙が問題になる。従来は、軍人の力を背景にして北京大学へ圧力をかけた、などと林紘は批判されている。だが、調べてみればその事実はない。

徐樹錚に関連したことも風説風聞の域を出ない。林紘が行なったといわれ、批判の根拠とされるすべての行為はウワサであって裏付けのないものだとわかる。

北京大学学生の張厚載についても同じ。林紘のスパイだと非難される。だが、林との関係で張も身に覚えのない罪を押しつけられている。私は事実を知って驚く。

では、北京大学と教授たちを当てこすったと断定されている林紘の短編小説2篇はどうか。

小説には、蔡元培、陳独秀、胡適、錢玄同をモデルにした人物が登場している。たしかに林紘が書いた。だが、その内容は一笑に付して終りにするのが当たり前のものだ。しかも小説ではないか。どこの世界に小説、すなわち虚構と現実を混同する研究者がいるだろうか。ところが、林紘については、現在にいたるまで小説と現実が区別できない研究者ばかりである。林紘批判の根拠にすることができると考えている。その人は、意識うえで異端審問官のつもりだ。

魯迅までが別の林紘冤罪事件に加担していることも明らかになるしまつである。それをいうなら、阿英も同様のことを行なっている。

前出の羅家倫は、暴露小説を掲載した雑誌を当局が取り締まることを期待していた。つまり、羅の方が言論弾圧を露骨に希望していたのである。ところが、文学革命派のひとりである彼の言論弾圧期待説は、こともあろうに林紘が希望したことにすり替えられた。

また、後には軍閥軍人である徐樹錚の名前をだして林が「武力による北京大学抑圧を促していた」という人も出てくる。根拠はないのだ。驚くべきことではないか。日本人研究者が書いた字句を2度も引用してしまったのは、それだけ印象が強いのである。

私は日本にいるのだから特別の資料、文献を持っているわけではない。ほかの研究者と同じ文章を読んでいるにすぎない。書いてあるままに読み進めていくと、私は従来の説明とは違う場所に到達してしまったというだけだ。いやはや、過去から現在まで一貫して主流である見方が逆転するのだから、ほとんど腰を抜かすことに

なった。

あとは拙著『林紓冤罪事件簿』（2008）をご覧いただきたい。

林紓冤罪事件を発生させた根底にあるものは、なにか。私は、今ここでそれを書く気にはなれない。

研究体制

このたび明らかになった林紓冤罪事件について、思考の筋道と結論を具体的に説明した。

私の研究方法についても少し紹介しよう。

研究体制はどうか。個人で行なうのか、あるいは研究集団を組織して行なうのか。一緒に研究している人はいないのか、と台湾では何度も質問された。いない、と答えると、寂しくはないかという。私はそういう状態になれてしまっている。

手間のかかる原作探索は、複数の人間が分担して作業をすれば時間の節約になる。そういうやり方もあるだろう。ただし、これには向き不向きがある。私のばあいは、その「不向き」に属する。性格だから、こればかりはしかたがない。作業の細部にいたるまで自分で関与したい。すべてを自分の力でやりたいという意味だ。細々とした研究分野にすぎない。ひとりでするのが性格にあっている。個人だから能力に限界がある。作業を徹底することはできないかもしれない。それならそれであきらめる。

私も過去においては、集団で共同作業に取り組む経験を持っている。昔、ある研究会の事務局に所属していたときのことだ。目録、索引、事典などの編集に参加した。そのときの体験からいうのだが、全体の作業進行は、もっとも不熱心な人物に左右される。分担作業を怠ける人物がいれば、実際にいたのだが、その時点で計画は不成功に終わる。怠けた人物が企画責任者だったからなんとでもいいようがない。その作業に費やした自分の努力と時間は、ムダになった。

その経験が複数回あったから、いやでも理解する。自分ひとりでやるほうが、いくら時間がかかろうと責任をとることができようというものだ。計画が不首尾におわれれば、それは自分が悪いに決まっている。

こうして、現在も『清末民初小説目録』の増補訂正作業を継続している。第4版を刊行する予定はない。だが、この目録が私の研究には必要だ。他人のためではなく自分のための目録なのだから、編集作業が中断するわけがない。目録に記入する

林訳シェイクスピア、林訳イブセンの底本についての説明は、書いても1行くらいのものにすぎない。だが、その裏には1冊の書籍になるだけの情報がつまっている。いくつかの作業は、私のなかで関連づけられて同時進行中の状態なのだ。

一瞬の判断

拙著『林紘冤罪事件簿』の核心部分を書き終えた瞬間、自分でも思わなかったことばが口から低く細く出てきた。

「こりゃ、ダメじゃ」

言語域の古層に刻み込まれている部分からの発語らしい。論文が成立しない、という意味ではない。深い部分からでてきたやや複雑な背景がある。

ふたつの側面から説明しよう。

拙著を表現して80年から90年に1冊というのは、従来の林訳批判を覆したという意味だ。つまり、先行文献のなかで関連する80本近くの論文のすべてが指摘しなかった事実を私が提出した。林訳について動くことのなかった、しかも間違っていた認識を私が正したのだ。その結果、今まで知られていなかった冤罪事件であることが明らかになった。

論文の書き方としては、林紘批判の直接の発動者である劉半農と鄭振鐸のふたりだけをあげて代表させることもできた。だが、私は自分の目につくかぎり、林訳の誤りだと説明した論文名と研究者名を明記して、さらに関係部分を引用した。中国大陸ばかりではなく、香港、台湾、日本、そのほかの地域の研究者を含んでいる。具体性を持たせるためには、そうすることが必要だと思った。林紘冤罪事件が長期間かつ広範囲にわたっていることを説明するためには、それが不可欠だと考えた。林紘は戯曲を小説化した、と誤って批判した人々がそれだけ多く存在したことを示している。林紘の側に立てば、それだけ多数の研究者によってムチ打たれたのだ。しかも、それは根本のところでも誤っていた。このことを証明するためには、研究者名を掲げることが必須だと判断した。

ただし、名前を出されたことはすなわち樽本によって批判された、と短絡して受け取る研究者がいなくてもかぎらない。まさか、とは思う。私は批判しているのではない。何度もそう明言している。誤解が広まっている事実を説明したかっただけだ。だが、この世界は狭い。事実を指摘されて立腹する人はいない、と誰が保証できるだろう。ほぼ1年後に小さな反応があった*10。

もうひとつは、五四事件直前における林紵の評価を逆転させたことだ。林紵は文学革命の反対者だ、と従来は説明していた。それが、現在も出版されている文学史の基本姿勢である。だが、林紵は文学革命派に濡れ衣を着せられた。実物の何倍にもふくらませた虚像になっている。これが事実だ。その方向に導いたのは陳独秀であり鄭振鐸らの文学革命派であった。ここまでくると、林紵に関する現代文学史の記述を根底から崩壊させることになる。

そういう視点で書かれた書物が、現在の中国文学研究界で認められるはずがない。

予測される将来の動きが一瞬のうちに見えた。文学革命派を支持する研究者からは無視されるだろう。それらを総合して「こりゃ、ダメじゃ」ということばになったようだ。

私の研究に関する日本の学界の理解度にも触れておく。

研究の理解度

自分に取り組んでいる研究課題は、日本の学界においてどのように評価されているか。

その理解度を測るひとつの物差しとして学術振興会の科学研究費が存在する。普通に考えて、研究に値する、つまり重要度に応じて研究課題の採択不採択が決定されていると理解するのではなかろうか。そのために専門委員が配置されて審査するのだ。事実、研究課題には点数をつけて評価し、採択か否かを決定している。

私は清末民初翻訳小説研究を主題にして数年にわたって申請しつづけている。だが、残念ながら不採択である。この研究についての私の説明が十分ではないらしい。審査員の理解を得ることができない。結局のところ、研究の重要度が低いと判定されていると考えざるをえない。これが現状だ。ご注意いただきたい。私はそれを怒っているわけではない。嘆いているわけでもない。その程度の認知度であるといっただけだ。

論文「林訳シェイクスピア冤罪事件」の末尾に記入した清涼飲料水の固有名詞について、普通はアルコール飲料で乾杯だろうといわれた。ご注目いただいて恐縮です。

わざわざ特定の清涼飲料水名を出したのは、そこが設立している財団に研究費を申請して不採用になったことが背景にある。別の書籍についてビールを出したのも同じ理由だ。

従来からそうなのだが、清末民初時期の小説研究は、注目されることが少ない。最近でこそ中国では若い研究者が出現している。日本での清末小説研究はどうなっているのか、と台湾の大学で質問があったが、私には答えようがない。清末小説研究会では、研究資料叢書を刊行しているが購入する気になる人はまれである。まあ、日本ではそれくらい関心の薄い分野であることは確かだろう。その状態が私にとっては通常なのだ。

日本では興味を引かない研究分野であることを私は否定しない。審査員の理解がとどかないのでは、私にはどうしようもない。ゆえに、研究費の申請が不採択になるのもしかたがない。だから、勤務校において私の研究計画について特別研究費が認められているのは具眼の士がいるという珍しい例だと思う。私が深く感謝している理由だ。

当該研究分野に対する評価が低いというのは、現在そうだというだけのこと。本来そなえている重要度からいって妥当だという意味ではない。

逆にいえば、誰も注目しない、あるいは研究の重要度が低いと判定される（私は審査員の理解能力が劣っていると知っているのではない）日本において、拙著『林紓冤罪事件簿』が刊行された。拙著によってきわめて根元的な問題が提起される結果になった。私はいうべきことばを持たないのだ。 罫

【注】

- 1) 高鳳岐の序は、以下に引用されている。林薇「林紓第一部自撰的短篇小説集《技擊餘聞》」『清末小説』第12号1989.12.1。同改題「林紓自撰的武俠小説 《技擊餘聞》最早版本辨正」『新文学史料』1999年第3期（総84期）1999.8.22。同「林紓自撰的武俠小説《技擊餘聞》最早版本辨正」林薇『清代小説論稿』北京広播学院出版社2000.11。「技擊餘聞（文言白話对照版）」がウェブサイト「才子佳人茶館 <http://caizijiaren.book.topzj.com/>」にある。
- 2) 呉十洲「“名士”乎？“造幣廠”乎？ 林紓（1852-1924）」（『民国人物綽号雜譚』天津・南開大学出版社1998.6 / 2003年改題して台湾で刊行）がある。呉十洲は「造幣局」ということばをもとにして妄想をふくらませた。根拠もないのに林紓の名誉を傷つけている。これを一般に中傷という。呉十洲はその文章において、林紓の論文題名を誤る、短編小説の新聞掲載日を間違う。関連して樽本

「林紵落魄伝説」を参照のこと。

また、李存煜「林琴南論」(『文藝論叢』第23輯1986.12。184頁)がある。「林琴南の翻訳活動は、手工業の工場[手工業作坊]に似た形式を採用して進められた」。ほめてその説明になったわけではない。「この奇形[畸形]の翻訳方式に加えて彼の翻訳態度が粗雑で、しかも口述者の多くが文章を生活にしていたわけではなく、その文学修養もいくらか割り引かざるをえなかったため、林琴南の翻訳は必然的に間違いが続出し、精彩も大いに減じたのである」。林紵が外国語を理解せず、口述訳者との共同作業を「奇形の翻訳方式」だというのだ。軽蔑しているのが明らかだ。この種の思考法は、李存煜に限らずほとんどの研究者が共有している。このほうが異常である、と私は考える。

- 3) 初出は天津『大公報』1917.2.1。再掲載は上海『民国日報』1917.2.8。胡適が見たのは『民国日報』のほうだ。以下は、正しい題名を掲げる論文。掲載紙のどちらに言及しているかも示す。

朱德尧『中国五四文学史』山東文藝出版社1986.11。148頁。『民国日報』

(つぎの2書は『民国日報』とするが題名を誤る。林薇『百年沈浮 林紵研究綜述』天津教育出版社1990.10。21頁(ただし、尹雪曼「中国現代文学史話」1977からの引用)。劉炎生『中国現代文学論争史』広東人民出版社1999.12。22頁)

葛留青、張占国『中国民国文学史』北京・人民出版社1994.1百巻本《中国全史》叢書。27頁。『民国日報』

洪越「五四文学革命的另一面 以林紵为中心」『現代中国』第2輯2002.3。155頁。『大公報』『民国日報』

楊聯芬『晚清至五四：中国文学現代性的發生』北京大学出版社2003.11。123頁。『民国日報』

江中柱「《大公報》中林紵集外文三篇」(『文献』2006年第4期(総第110期)2006.10.13)において「論古文之不宜廢」「林琴南再答蔡鶴卿書」「為閩事覆諸同志書」を収録する。いずれも『大公報』掲載。

林大文「後人心目中的林紵」錢理群、嚴瑞芳主編『我的父輩与北京大学』北京大学出版社2006.11。『大公報』から全文を引用している。ただし、「1917年2月8日上海《大公報》」と誤記する。

中国史話編輯委員会編著『中国史話(6) 呐喊声中的凶強变革』台湾・大地出版社2006.11。158頁。『民国日報』。写真がそえられている。

程巍「為林琴南一辯 “方姚卒不之陪”析」(『中国図書評論』2007年第9期(総199期)2007.9.10。ウェブ上で電字版を読むことができる)に興味深い指摘がある。林紓の「論古文之不宜廢」は、『胡適留学日記』1917年4月7日付に採録されている、と。これは驚いた。林紓関係の文献ばかりをさがして見つけられなかったからだ。胡適の日記に収録されているとは思わなかった。たしかに架蔵の台湾商務印書館版(1947.11/1959.3台1版)1116-1117頁に見える(季羨林主編『胡適全集』第28巻合肥・安徽教育出版社2003.9ならば、538-540頁所収)。日記には題名が正しく書かれている。論文名の誤記は、胡適が『新青年』に投書したときに生じたと理解できる。程巍論文は、林紓の文章が間違っていると批判した胡適のほうが間違っているとのべて説得力がある。ただ、論旨とは別の細かい箇所が腑に落ちない。すなわち、程論文は「論古文之不当廢」と誤ったままであり、『民国日報』を掲げるのみだ。

- 4) 桑逢康『胡適在北大』北京・文化藝術出版社2007.6。256頁
- 5) 鄭振鐸「林琴南先生」『小説月報』第15巻第11号1924.11.10
- 6) 松村茂樹「王雲五と鄭振鐸 商務印書館史の一断面」『中国文化』漢文学会会報第52号1994.6.25
- 7) 瀬戸宏「中国のシェイクスピア受容略史」『シアターアーツ』11 2000年1号2000.1.31。99頁
- 8) 『林紓冤罪事件簿』が印刷されてきた2007年7月のことだ(奥付表示は2008.3.31)。その後、該書で言及した以外に小説化本について説明があるのを見つけた。入手した坪内逍遙訳『シェイクスピア研究栞(新修シェイクスピア全集第四十巻)』(中央公論社1935.5.15)には小説化本について紹介がある。「作の梗概を物語風にしたもの」と小見出しがある箇所だ。引用する。「チャールズ・ラムの『物語』は、明治の初期以来格別に歓迎されて、最近年の訳までも合せると、十三種程に及んであるが、其他のは殆ど顧みられない。勿論、それはラムのが名高くもあり、文章として優秀な部分が多いからでもあらうが、一つは諸学校の教課用書となつてゐるからでもあらう。教課書としてはともかくも、シェイクスピアの梗概を知るためとしては、ラムのは適當ではない。といふのは、梗概としては、余りに省略された部分が多いからである」(44-45頁)。そうして、ラム以後のシェイクスピア物語を14種あげている(46-47頁)。だが、これにはクイラー=クーチ版は収録されていない。

9) 鄭振鐸「導言」『中国新文学大系』第2集文学論争集。7頁

10) 紋切り型の表現を使うのが妥当だ。「最初にとび出てきて攻撃したのは瀬戸宏である」。以下を参照のこと。樽本「瀬戸宏報告を評する」「林紓のシェイクスピア観 林紓は冤罪か」について、『清末小説から』第92号2009.1.1
瀬戸宏は、何かいわずにはいられなかったらしい。それほど私が提出した論文の衝撃度が大きかったということか。瀬戸宏が報告したその場に、私は評論員として立ち会った。それにしても、瀬戸宏報告は内容がなかった。通説のままに林紓批判をくり返し、林紓に濡れ衣を着せつづけた。わざわざ出てきて、なぜみずからの無知をさらしたのか。いつものことながら、意図が不明である。

(たるもと てるお)

-渡辺浩司
- 『清末小説から』第88号 2008.1.1 晩清小説作者掃描(14).....武 禧
最初の漢訳「ドン・キホーテ」 「林訳小説叢書」の作品数
.....樽本照雄沢本香子
- 《哲理小説 哲學之禍》の原作
.....渡辺浩司 『清末小説から』第90号 2008.7.1
- 近代小説家張毅漢生平續考...郭 浩帆 「官場現形記」裁判の真相...樽本照雄
網羅精英 任人唯才張 英 晩清小説作者掃描(15).....武 禧
狄平子小説資料一則武 禧 November Joeの中国語訳(下)
晩清小説作者掃描(13).....武 禧渡辺浩司
- 蔡元培を中傷した北京大学元教員
.....樽本照雄 『清末小説から』第91号 2008.10.1
- 『劉鶚集』はよろしい.....樽本照雄
- 『清末小説から』第89号 2008.4.1 莎士比亞在1916年前的中國...郝 嵐
『繡像小説』研究の現在.....樽本照雄 晩清小説作者掃描(16).....武 禧
- November Joeの中国語訳(上)